がま研 かわら版

第 14 号
発　行
筑波山がまの油売り口上研究会

# 祝 清水泰清さん 日本百名山完登！

佐藤貞弘

平成十八年九月十七日、山梨県と静岡県にまたがる南アルプス「間ノ岳」をめざす登山者の中に、既に九十九の名山に登頂している清水がいた。

昨日、最後の登頂にこだわった「北岳」を制し、残るはこの山体のみ。一歩、また「一歩」と自分の足元を確かめながら確実に標高を稼いで行く。

この時を目指して、北は北海道から南は九州屋久島まで・・、よくこの身体・この足でここまで来れたものだ。今までの苦しさとつらさは百番目の山頂に立った時に総て吹き飛んで、達成感だけになるはずである。

流れ出る汗の中、高まる気持ちを抑えながら歩む行く手に遮るものがなくなった。「山頂だ！」遂にやった。ここに清水泰清六十六歳は七年という短期間に百名山を制覇したのだ。

「やったね！おめでとう！」仲間の祝福に、百名山達成の喜びが怒涛のごとく全身を駆け巡る。感激に濡れたその瞳には、清水が登山の原点と意識した「富士山」、自信をつけてくれた「利尻岳」をはじめ洋上アルプス「宮之浦岳」など百名山の山々が次から次へと見えてくる。勿論、四六のがまの住む関東の名山「筑波山」も、そして家族の姿が・・「ありがとう。」

（ここまでは清水さんから頂いた資料をもとに創作したものです。）

清水さんは間ノ岳の登頂について「台風も進路を変えて山頂にいる間は晴天、どっしりとした南アルプスの重鎮でここを最後の山に選んで正解だった。」こう記録していますが、「山行に当ってはこのような緻密な計画と冷静な判断、そして、海外にも及ぶ行動力が百名山制覇の源になったものと思います。

登山を始めた頃は奥様もご一緒に山行を楽しんでおられたと聞きましたが、清水さんが登山に目覚め、百名山を意識しはじめたことを知った奥様は完登目指す旦那の後方支援に徹したことは疑う余地がありません。今後は初心にかえって、お二人での山行も楽しんでいただきたいと思います。

「清水さん、日本百名山完登！おめでとうございます。」

## 日本百名山を踏破しました

清水泰清

登山家の深田久弥が昭和三十九年に日本百名山を選び　折からの中高年登山ブームに火を付けました。選定の基準は　山の品格、歴史、個性のある事で高さも千五百米以上という線を引きました。　我等が筑波のお山は高さには問題があるものの、それらを補って余りある物があるとして例外で選定されたのです

私は山登りなどにはあまり興味がなく　多少の経験がある程度でした　ところが還暦を記念して登った富士山で山の魅力に取り付かれてしまいました。

登山はすばらしいスポーツです。それまで夢中になっていたゴルフは「反省のゲーム」で精神的に良くない。夜になっても『ああすればよかった。　あのショットは何故もっと右を狙わなかったのか』などと、悔いの残る反省とライバルへの怨嗟。

ゴルフは止めませんが、中高年

13番目の登頂になる筑波山

にはもっと楽しく心と体を生き生きさせるものがありました。

山頂からの展望は総ての苦しさとつらさを忘れさせ、下山後のはつらつとした心は次の山への想いをかき立ててくれるのです。高山植物も疲れた心を慰めてくれます。

コマクサ　ツガザクラ　サワギキョウ　ハクサンフウロ　チングルマなど。また紅葉の素晴らしいダケカンバの黄色、ナナカマドの真紅。

そして、山では一緒に歩きながら人生を語り合い意気投合した素晴らしい友人も出来ました。

Yさんは同い年の日立製作所の元エンジニアで、現役の私では考えられない組み合わせに運命の不思議さを感じたものでした。

私が二十五番目の山、四国の剣山で出会い、彼は四十番目でしたから丁度良い先輩となり、種々教えてもらいながら百名山達成の意欲を高めて行きました。彼と登った山は計二十。彼との出会いが無かったら百の達成はどうなっていたかと思うのです。六年間で達成したいと思っていましたが結局七年かかり六十七歳の誕生日前に達成出来ました。

私は百名山を登る度にその山の高さを記憶しようと考え、記憶する方法を考えながら登って来ました。それは百すべてにあります。思い出の山を登った順に書いてみます。

**筑波山（つくばさん）**　八七七m
筑波のお山は花ならび
平成十二年十二月　がま研の皆さんと一緒に登りました。

**早池峰山（はやちねさん）**　一、九一七m
ひどくいーなと山に惚れ
こんな具合です。

**木曾駒ガ岳（きそこまがだけ）**　二、九六七m
憎い空しい木曾の駒
大雨でした。

**磐梯山（ばんだいさん）**　一、八一九m
いやーいくぞ磐梯山

**祖母山（そぼさん）**　一、七五六m
いなご六ぴき　そぼさんに
名前通りの穏やかな山でした。

**塩見岳（しおみだけ）**　三、〇四七m
さー鷹揚な山では無いぞ
三伏峠で音を上げました。

**剣岳（つるぎだけ）**　二、九九八m
三千に2つ足りない剣岳
もう少し早く登る山でした。

**穂高岳（ほだかだけ）**　三、一九〇m
細工は流々穂高さん
好天に恵まれました。

**北岳（きただけ）**　三、一九三m
北岳は最高山（さいこうさん）

富士山から始まった私の百名山の最後は、国内第二の北岳にこだわりました。

以上

完登目前、97番目の穂高岳

## がま口上練習会　水戸教室発会

懸案でありました水戸地区の練習会場が開設されるはこびとなり、去る二月三日に那珂市の田向公民館で発会式が行われました。練習、技能向上にぜひご利用ください。

【問合せ先】　世話人　清水泰清　氏

# ガマの油売り口上講座を終えて

那珂市　星野　馨

九月二十三日・十月七日・二十一日・十一月五日の四日間、『小町の館』において『ガマの油売り口上研究会』主催による同講座を初めて受講させていただきました。

私は、常々独特の語り口で知られるガマの油売り口上に興味がありましたが、さて何処に行けば習得が出来るものかと思案していたところ、思わずもある日の新聞記事の中に一般希望者を対象にした同講座が開催されることを知り、早速受講申し込みをしました。

以前何度か新治地内は訪れたことはありましたが、会場の『小町の館』は不案内であり、自宅も遠方ではありましたが、往復三時間余りをかけながらも何とか、のべ四回の講習を無事終了することが出来た次第です。

初日の参加者は三十名程度でしたが、年齢的には私とほぼ同世代の五十～六十代の方が中心であったように見受けられましたが、遠くは日立市からお見栄の女性もおられました。　参加前は口上のみの講座と考えておりましたところ、広く筑波山やがまの油売りの歴史等に関する説明も詳細に聞くことができ、参考になること大にして認識を新たにすることが出来ました。

公務多忙の中、四回にわたり講師を努められました会長の林先生は、早くも中学生の頃にはガマの油売り口上を始められ、今日まで鍛錬を積まれてきただけに、その歴史及び口上においても長年の努力を感じ取ることが出来ました。

現在、会員数も六十余名とのことであり、会長をはじめ役員の方々を中心に日々技術の向上に努められ、各方面からの口上依頼も多いとのことでありますが、茨城県を代表する観光ＰＲの目玉としても今後永く引き継いでいくべき芸であると考えます。

出来れば会員の一人として加えていただければと考えております。

貴会の一層のご活躍を祈念いたします。

平家本陣前にて記念撮影　宴はまだまだ続きます

# 雪景色と温泉

冨　山　繁　雄

十二月二日午前七時半、参加者二十名を乗せたバスは新治支所を出発。忘年会旅行の始まりです。湯西川温泉「平家本陣」には、ちょうど昼食がうまく食べられる腹具合の時分に到着。

腹ごしらえがすむと、近くの「平家の里」へ、兵助さんよりも、もっと昔にタイムスリップ。あとは、温泉で、湯っくり、湯ったり。大広間での宴会は、ほかの大勢のグループの方々と一緒です。芸達者のオンパレードですが、わが「がま研グループ」の方々も負けてはいません、特にダンスで大活躍。拍手喝采。和やかな雰囲気の中、大先輩より貴重な経験談をお聞きすることができたこと、大変うれしく思いました。

翌朝、目が覚めると外は雪景色。早速朝風呂です。木々に白い花が咲いたように山が迫ってきます。その中での露天風呂、これは最高です。

さて、帰りのバス中は、（渡辺）ヒロシ&きみまろ名人、（市村）山本リンダ嬢、（成田）西郷輝彦青年、そして詩吟、民謡、ナツメロなどなど。すばらしい芸の数々で時がたつのがもったいない。そんな思いのなか、日が落ちる前に無事、新治支所に到着。今回、雪景色と温泉を堪能させていただきましたが、それ以上に得るものが大きなバス旅行でした。宇野先生、そして幹事の方、またいろいろな抽斗の中を披露してくださいました皆様方、本当にありがとうございました。

今はただただ精進、精進です。

# 「ガマ石」は 黙って口上を聞いていた

渡辺　由正

夏真っ盛りの八月六日、例年の通り、筑波山ガマ祭りが、炎天下盛大に行われた。

御幸ヶ原より、女体山頂に向かう途中に、ガマが口を大きくあけて、関東平野を一望にして鎮座ましましている。ガマ石の由来は、その岩がちょうどガマがぱっと口を開いている姿とそっくりだからと、昔から言い伝えられている。そのてっぺんには、厳かに「シメナワ」が張られていて、誠に神聖な石である。

そのガマ石の前で、口上を奉納させていただく機会を得て、その光栄に感激ひとしおであった。

そこは、石のごろごろと出ている不安定な坂道で、女体山へ向かって登って行く人、また同じ道を下って来る人たちが絶えず交錯する場所である。

こんな「動」の中での口上は、どうしたらよい「ものか考えさせられた体験であった。口上の最中に、熱心に聞いている人の前を往来されるのも非常にやりにくいものである。そこで頭の中をよぎったことは「どうにかしなければ」という思いであった。

そこでそんな道行くお客さんの脚を止めて口上を聞いてもらうことが最良と考えたわけである。口上に「間」をとってどんなふうに呼び止めるか、口上の内容をこわさないことを前提に臨機応変にさりげなく語りかけたいと思ったわけである。

「そこの仲よいお二人さん、そんなに急いでどこへ行く。ちょっと止まって聞いてらっしゃい。効きめ万能、ガマの油だよ。筑波登山の記念のガマだ。登り下りの重たい足にガマの油をつけてみな。天下太平、疲れもとれて家内安全、万々歳だ・・・。」

注意しなければならないのは。そのために本来の口上がぼやけてはならないと思う。地形的に平坦なところで、お客さんの集まっているところ、「静」のところで述べる口上とは大変な違いがあるように思われる。

そんないろいろな場に応じた「口上」の流し方なども、話し合ったり、ご「指導もいただきたいと思っている。

そんな色々な体験をとおして、いつも次のようなことを考えている。

◎ 集まった人たちの年齢層、男女の別、場の雰囲気なども十分考慮に入れた口上でありたい。

◎ 口上をのべている自分に注意力を集中してもらう方策を常に考えて努力していきたい。

◎ 口上師の「表情　しぐさ　動き」なども重要な要素「になると思う。

貴重な体験をさせていただいた林会長・宇野先生に感謝しつつ、ガマ祭りの報告とさせていただきます。

## ガマ三題

・ガマ祭り関八洲の夏真盛り

・ガマ石の姿口上奉納す

・ガマの油行く人来る人語る人

### 編集後記

本年度も講習会を通して、新しいメンバーを迎えることが出来ました。多くの方から、いろんな切り口で原稿をお寄せいただき、さらに楽しく充実した　かわら版　にしていきたいと思います。

次号の原稿、六月をめどにお寄せください。

編　集　子